

KOEKISHA

公益社ハートフル

Heartful



死後のトラブル防止、自分らしく人生を全うする

ライフエンディング徹底総括

「ライフエンディング」という言葉は浸透し始めていると言えますが、ややもすると「終活」とイコールで解釈され、その理由や進め方、あるいは当人がやるのか、家族が関わるのか、といった様々な要素はまだ、理解されていないようです。お盆、夏休み、年末年始など家族や親しい人と集まる際は、ライフエンディングを考え始める最適なタイミングです。ここでは、改めてライフエンディングとは何か、どういうステップで何をするのか、基本から徹底総括していきます。

なぜ遺族は後悔するのか 喪主経験者の52%が「故人に 聞いておけばよかった」と後悔

葬儀のことで後悔をする遺族は意外と多いものです。

中でも、「故人に聞いておけばよかった」と喪主経験者の2人に1人が後悔しています。具体的には、「葬儀についての希望」、「葬儀に呼びたい人」が上位に挙がっています。

故人に聞かなかったことで、故人が望んでいた通りの葬儀だったか確信が持てない。家族や親戚と採めたなどの問題が起こっています。

「故人に聞いておけば」 防げたトラブル

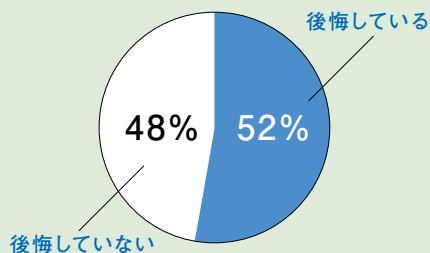
「故人に聞いていなかった」遺族の葬儀の現場でよくみられる事例を挙げると。

- ・遺族間で、葬儀の形式について（家族葬にするか一般葬にするなど）採めた。
- ・故人が生前親しくしていた人がわからず、葬儀の案内をしなかったことから後で「なぜ知らせてくれなかったのか」と責められた。
- ・葬儀後、知人から「故人が生前、こんな葬儀をしたい」と言っていたことを聞き、自責の念にかられ精神的につらかった。

反面、生前から故人と死後のことを話せていた遺族は、トラブルも無く、故人らしい人生のエンディングを迎えられたことによる達成感を得られ、葬儀後に思い悩むことも少ないと言えます。



「故人に聞いておけばよかった」と後悔しているか？



故人に聞いておけばよかったことランキング

1位	葬儀についての希望	252名
2位	葬儀に呼びたい人	206名
3位	遺品の整理について	196名
4位	財産・相続について	171名
5位	遺影写真をどれにするか	169名

出典 調査名:ライフエンディングに関する意識調査
調査期間:2020年3月6日-9日 回答数:1,000名
対象者:喪主もしくは葬儀を取り仕切った経験のある40~70代の男女



終活から ライフエンディング計画へ

ライフエンディングについて検討すべきことは、「葬儀のスタイル」「葬儀に呼びたい人」「相続」「死後の手続き」など、終活と大きな違いはありません。

しかし、終活は、死後のことを個人的に考え、プランする傾向が強く、死後に自身の希望が100%、遺族に伝わらないリスクも考えられます。

ライフエンディングを考えるということは、自身の死後に関わる、家族や親しい人など、周囲の人々と一緒に進めていくところが、終活との最大の違いです。

今後、終活はライフエンディングプランへとシフトしていくことが予想されます。

ライフエンディングプランは、 2つの軸で整理し、いつでも、 どこからでもスタート

ライフエンディングプランは、2つの軸で考えると整理しやすくなります。

1つの軸は、「生前の準備」「葬儀」「葬儀後」の時系列での3つの要素。

2つ目の軸は、「パーソナルなこと」「公的なこと」「法的なこと」に分類します。

これらの分類で抽出した項目は、どこから始めても、何度でも再考することができます。

ライフエンディングのプランニングを円滑に進めるために

お盆、夏休み、年末年始など家族や親しい人が集まる機会は、ライフエンディ

ングを考え始める絶好のタイミングです。

親世代のライフエンディングが気になる年代の家族であれば、家族の誰もが、「そろそろ考えておきたい」と思っている傾向があります。

誰かリードする人を決め、一番話しやすい内容から、少しずつ始めます。そして、次に家族が集まる時に、「また話そう」という空気を作ります。離れていても、共通の課題ができることで、家族の絆も深まり、ライフエンディングの検討もスムーズに進みます。

親のことを考える場合

親が元気なうちに、 子世代がリードすることがカギ

親の高齢化や、病気などで話すことや、外出が困難になってしまうと、ライフエンディングの計画も思うように進まなくなります。

親が元気なうちに、子世代がリードすることで、親子で専門家へ相談に行ったり、終活セミナーなどのイベントに参加するなど、より積極的にプランニングをすることが可能になります。

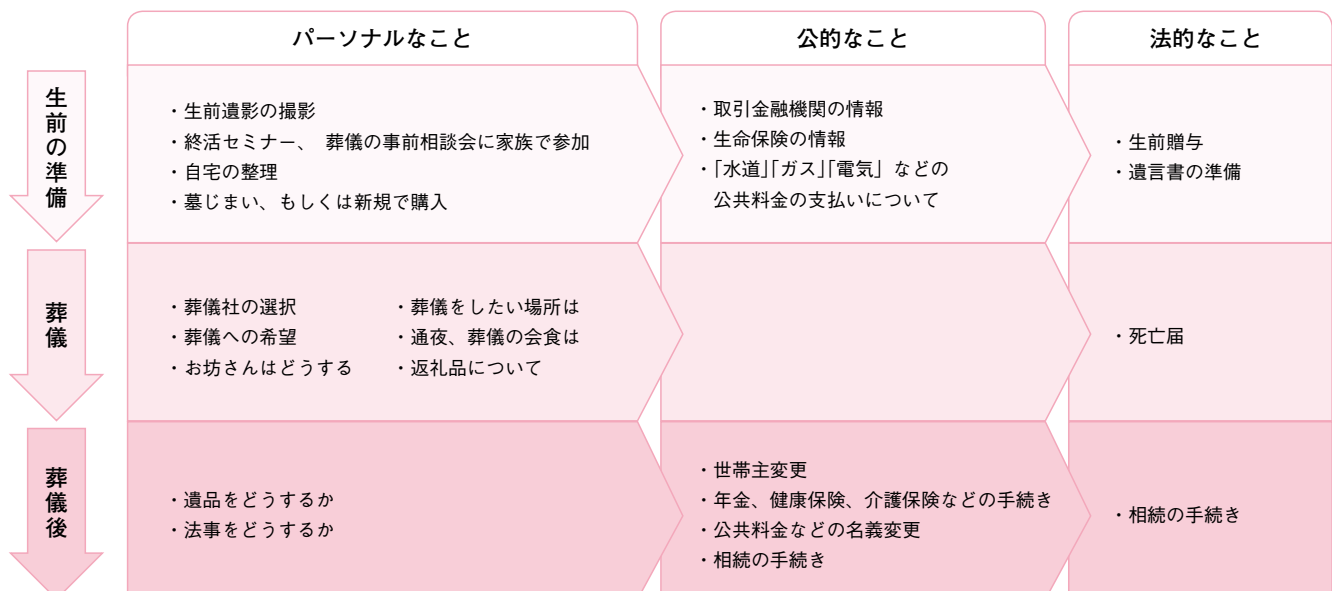
自身のことを考える場合

自分の意思、希望を 家族に理解してもらう

自分の死後のことを子供に託すために、生前から自身の意思、希望を理解してもらう機会を作ることから始めます。

子世代で、親の死後について話すことに躊躇している場合、親がきっかけを作

【ライフエンディング プランで必要な項目例】



ることで、その垣根を取り払うことができます。

自分の死後、残された家族に迷惑を掛けたくないとする親が多いもの。託される子供たちの考えも取り入れて両者で納得のいくライフエンディングを検討していきます。

おひとり様の場合

よき相談相手を得ることから

未婚によるおひとり様、子供がおらず、パートナーを先に亡くしたおひとり様。いずれも近年急増し、今後も更に増加していく見込みです。

誰かを頼らなければならない死後のことは、不安なことです。

ライフエンディングを計画するためには、よき相談相手を得ることです。親族や親しい人など頼れる人を作っておくこと。また、葬儀社や銀行が提供する「葬祭信託」「遺言信託」サービスを利用するなど考えられます。

エンディングノートの本当の役割

エンディングノートは遺言書のように法的な効力はないものの、自身の希望を家族で共有する強力なツールと言えます。「介護と看病について」「葬儀・お墓につ

いて」「葬儀に呼びたい人の連絡帳」「資産、相続について」などライフエンディングのプランを家族で検討していくために必要な項目が網羅されています。

また、「私のプロフィール」、「家族へのメッセージ」といった自身の人生の軌跡を振り返るページもあり、これらは、自分自身が納得のいくライフエンディングを考えるための大切な項目になります。

この1冊があれば死後、遺族が故人の意思、希望を尊重した葬儀とその後の手続きなどをスムーズに行うことができます。エンディングノートは、何度でも更新し、保管場所は家族と共有します。



情報収集で、ライフエンディングの計画をより円滑に

ライフエンディングに関する情報を収

集することで、家族での話し合いや、専門家への相談など、より具体的に進めていくことが可能になります。

しかし昨今、ライフエンディングに関する情報は、インターネット上や雑誌などで溢れています。

そこで、葬儀社主催のセミナーや事前相談会などを活用することで効率よく情報を収集することができます。

ライフエンディングのプロ集団、葬儀社をフルに活用

葬儀社との付き合いは、誰かが亡くなったところから始まるだけではなく、生前からできます。

長年の経験・知見を持つ、ライフエンディングのプロ集団と言えます。ライフエンディングコンシェルジュ、葬祭ディレクター、グリーンケアサービスの専門家などが常駐し、何度でも無料で相談を受けています。

また、弁護士、司法書士などの専門家とのネットワークも保有しており、ライフエンディングの基本から、より専門的なことまで対応が可能です。

これからのライフエンディングを計画していく上で中心的な存在になっていくことが予想されます。

家族だけだと話しづらい時はプロに任せる手も。

葬儀のプロに聞いた、後悔しないお葬式とその後

葬祭ディレクターが実際に経験した、生前に家族で話しておけば起こらなかった葬儀のトラブルを紹介します。

Q なぜ生前に家族で話すことが大事?

A お葬式の現場で発生する問題のほとんどは、生前の話し合いで避けることができます。実行不可能な独りよがりなお葬式の希望を言い残してしまうと、実行できなかった遺族の心に傷を残します。一方でお葬式の希望を全く言い残さなかったら、遺族は途方に暮れてしまいます。こんなふうにならないために生前の話し合いが必要です。

Q 公益社の終活セミナーではどんなことをやるのか?

A 良い葬儀屋さんの見分け方、家族葬のポイント、エンディングノートの書き方、最近の葬儀事情、参列のマナー、上手なお寺やお墓の付き合い方など、終活に関する様々なテーマで開催しています。最近はお家族で参加される方も増え、ライフエンディングに関するご相談もお受けしています。

Q 生前に話をしていなかったことで起こったトラブルは?

A 葬儀に呼ぶべき人に連絡するのを忘れてしまい、葬儀後に抗議を受けた。葬儀に呼んではいけない人に声をかけてしまい、お葬式で口論になった。葬式に誰も呼ぶなど言い残したが、社会的地位が高い人だったのでたくさんの人が参列した。一方的に散骨して欲しいという遺言を残してしまい、遺族が困ってしまった。妻の遺骨をどこに納骨するかでもめた。亡くなって1年後にエンディングノートが見つかるが、すでに手遅れだったなど数々あります。



1級葬祭ディレクター
安宅 秀中(あたぎ ひでなが)

20年間で1,000件以上の葬儀を担当。
葬祭ディレクター1級(厚生労働省認定・葬祭ディレクター技能審査制度) 葬祭研究所主任研究員
NHKに終活のエキスパートとして出演

葬儀社のセレモニーホールを まるごと紹介

昨今、葬儀社のセレモニーホールで執り行うケースが増えています。葬儀専用施設として設計され、家族葬から大規模な葬儀まで行えます。残された人が、故人を偲ぶ大切な時間を自宅で過ごしているような、工夫がなされています。



葬儀場



安置室

全館安置用のお部屋があり、自宅で遺体を安置しているのと同様、親しい方にお参りしていただくこともできます。



家族葬から大規模な葬儀まで執り行えます。仏教・神道・キリスト教など全宗教に対応。また、無宗教・音楽葬など、テラーメイドな葬儀も実現できます。



外観

いずれも駅から近くにあり、参列に便利です。入り口には門が設置され、故人が自宅の玄関をくぐったかのような配慮をしています。



会席室

自宅のダイニングルームのようにくつろげる家族葬向けから、大人数に対応したタイプなど各種あります。喪主のご希望に沿った食事を用意できます。



控え室

浴室付きのお部屋で自宅のように休むことができます。

ロビー



参列者が、葬儀までの間、ゆっくりとくつろげるようロビーを用意しています。

個室でゆっくりと葬祭ディレクターとお打ち合わせが可能です。



相談室

公益社 会館一覧

首都圏(東京・神奈川) 13 会館

用賀 高輪 雪谷 喜多見 田園調布 高円寺
明大前 上板橋 吉祥寺 仙川 東久留米
日吉 たまプラーザ

近畿圏(兵庫県・大阪府・奈良県) 35 会館

天神橋 森小路 城東 西田辺 玉出 豊中 石橋 吹田 江坂 千里 千里山田 高槻 守口 番里園
枚方 出屋敷 枚方 正俊寺 くずは 東大阪 共善はびきの 堺 なかもず 津久野 岸和田 西大寺
学園前 富雄 六甲道 甲南山手 住吉御影 武庫之荘 西宮山手 甲子園口 宝塚 川西多田

公益社とは 燦ホールディングスグループの葬儀サービスを提供する葬儀会社。1932年に大阪で創業。1994年に葬儀会社として初の株式を上場(当時の大証新二部)。2001年に東証大証一部に株式上場。2004年に燦ホールディングス株式会社に商号変更、持株会社となり、会社分割により新たに設立した株式会社公益社に葬祭事業と運輸事業を継承。首都圏と近畿圏を地盤とし、48の葬祭会館を運営するグループの中核会社。創業から88年の豊かな知見を活かし、家族葬、一般葬、社葬など、小規模な葬儀から大規模な葬儀まで執り行うことができる国内最大手の葬儀社です。<https://www.koekisha.co.jp/>



大阪本社



東京本社